2009.4.30／Vol.16

京都大学
大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter　第16号

目次

国際交流の場としての大学文書館
森　純一 …… 2
アーカイブズの枠組み：
オーストラリア国立大学アーカイブズ・プログラム訪問記
森本 祥子 …… 4
一枚のビラでも大切に
松尾 尊兊 …… 6
『第三高等学校関係資料』の全面的公開を実施しました
西山　伸 …… 7
日誌 …… 8
大学文書館の動き：
常設展図録の英文版を刊行しました
…… 9
お知らせ：
大学文書館では学部や研究所等が発行した刊行物を閲覧できます
…… 9
京都帝国大学書記官考
清水 善仁 …… 10

破壊活動防止法反対デモ風景（1952年６月５日）

破壊活動防止法（破防法）は、破壊活動を行う団体・個人を規制するために制定された法律。学生や学生運動に対しても規制が適用されることが懸念されたため、学生は制定反対のデモを行った。この時に配布されたビラなどを『戦後学生運動関係資料Ⅰ』として大学文書館で所蔵している（関連記事６頁）。

国際交流の場としての大学文書館

京都大学国際交流推進機構長
京都大学国際交流センター長・教授　森　純一

1. 大学文書館で歴史を追体験する

私はこの5年間、京都大学国際交流センターに勤務し、海外の提携大学の教職員や学生（以後、国際学生と呼ぶ）に大学を案内することが多い。そんな私にとって、文書館は様々な手法やアイデアを凝らして、外来者にも京都大学の豊かな歴史を追体験させてくれる貴重な場だ。

写真は昨年、タイのカセサート大学の学生を国際交流科目で受け入れた際の見学風景である。国際交流センターは国際交流科目の実施責任部局で、学生を2週間程度受け入れて、本学での講義と、京都や奈良などでの日本文化研修を行っている。その講義の一環として、文書館の西山伸先生に京都大学の歴史について講義をお願いしている。前半の40分は時計台記念館の講義室での講義と質疑応答。そして、後半の40分程度は、西山先生の案内で文書館の展示を見学する。

国際学生からよく受ける質問でいつも印象に残るのは、学園紛争の映像を映すスクリーンの前での彼らの問いかけだ。

Why did the students riot against the police?

（なぜ学生たちは警官に対して暴動を起こしていたのですか。）

日本人学生も同様だが、多くの国際学生は1960年代後半に世界的に吹き荒れた学園紛争の嵐を知らない。私は1969年に大学に入学した。学園紛争時の、学生たちのあの独特の姿や演説の調子を鮮やかに記憶している私には、今の学生たちが歴史的知識としても学園紛争を知らないことは驚きであった。

しかし、若い学生、特に国際学生にすれば、日本人の学生がヘルメットをかぶってゲバ棒を持ち、大学の中を行進するなど、今の落ち着いた学園風景からは、想像も出来ないことなのだろう。京都大学では時計台が占拠され、正門が焼け落ちた。そんな説明をすると学生たちは真剣に聞き入っている。そして学生たちの行動の裏にどのような事情が隠れていたのかについて、真剣な質問がやって来る。

文書館で、国際学生と学園紛争の映像の前に立つ度に、私は今も国内外を問わず、若い学生たちが、国家や世界、社会の在り様について、真剣に考えていることを再発見して、ある種の安堵感を抱くのが常である。

2. 学生たちのお気に入り

学園紛争のビデオのほかに、国際学生たちの関心が高いのは、吉田キャンパスの模型、昭和の学生の下宿模型、湯川秀樹先生の展示である。

1930年代の吉田キャンパスの精緻な模型は、現在との比較が明瞭に出来て、学生たちの興味を引く。学生たちが一渡り見たところで、西山先生から「腰を屈めて、視線を模型の小さな人間の目の高さで眺めて見てください」と声がかかる。実際そうすると、鳥瞰していた時とは一転して突然、自分自身が1930年代の学生になって、キャンパスにいるかのような気分になるから、不思議だ。市電が百万遍の交差点を走っている。吉田周辺は農村だ。また、煙突が多いことも目を引く。かつては工学関係の施設が多く、エネルギー源としてボイラーを焚いていたからだ。許可を得て、写真に残す学生も多い。

原寸大に復元された昭和時代の学生の下宿も人気がある。なぜか、窓の外に干された手拭いが印象に残るようだが、本棚に入っている本も面白い。河上肇の『資本論入門』、また『ゲーテ全集』も入っている。中国の学生に、当時の学生がマルクスの本をよく読んでいたと説明をすると、彼らは改めて、4畳半の部屋を眺め直す。学帽をかぶりながら食事をしている髭の学生の写真も興味深いようだ。

湯川秀樹博士のノーベル賞受賞の展示では、多くの学生が尊敬のまなざしを向けているのが分かる。湯川先生の英語論文の下書きが展示されており、熱心に読んでいる学生をよく見かける。

以上、3つの他には、初めて女子学生の入

学が許可された際のコーナーが、特にタイの学生に人気がある。タイの国立大学では工学部でも女子学生比率の方が高い。そのような場所から来た学生には新鮮な驚きとして受け取られるようだ。一方、事前の講義の中でも説明された学徒出陣の展示については、私が思うほどの反応はない。彼らには遠い世界なのかと思ったが、むしろ国によっては、兵役がそれほど非日常的ではないのかもしれない。

3. 国際学生に見せる意義

2005年に、西山先生に初めて講義をお願いした。その時は、私が英語での通訳をした。文書館の常設展解説書「京都大学の歴史」をいただき、辞書を片手に必要な英語を見つけていったものである。普段なかなか使わない英語もある。たとえば召集令状をどう訳すのか、draftというのか、などと準備をした。近いうちに解説書の英語版もできると聞いており、大変に楽しみである。

文書館での京都大学の歴史についての講義を国際交流科目の研修プログラムに盛り込むのには、理由がある。その第一は、本学の歴史を国際学生によく理解してもらい、本学と日本という国に関心をもってもらうためである。本学は明治以後の日本史の中で重要な役割を担っている。明治時代の発展の基礎となった科学技術への貢献、また太平洋戦争における学問の自由を巡る事件、そして優れた研究の象徴であるノーベル賞の受賞などである。これらの具体的な事実を通して、京都大学が永年の多くの人々の努力の結晶として、今ここにあることを、国際学生たちに見てもらいたいと思う。

第二の理由は、博物館、図書館と並んで大学の顔である文書館の「しつらえ」が、彼らに感銘を与えると思うからだ。かつて国際交流で訪れたシドニー大学、香港大学には、大学の歴史を伝える素晴らしい記念館があった。シドニー大学のNicholson Museumは堂々たる本館の中にあり、1851年から1862年まで、初代学長として大学の基礎を築くことに尽力したCharles Nicholsonの写真が掲げられている。香港大学は1910年に創立された中国でもっとも古い大学の一つであるが、その歴史はメインビルディングの脇に立つ瀟洒な建物、Fung Ping Shan Buildingに凝縮されている。Fung Ping Shanは香港の大富豪で、中国人のための教育を強く希求し、その実現に貢献した人物である。

京都大学大学文書館や上記の記念館に共通して感じられるのは、それぞれの大学の持つ歴史の重みである。これらの大学が優れた研究成果、教育成果を挙げているのは、先人の蓄積があってこそのものだ。文書館はその事実を伝えてくれる場である。

4. 京大生の京都大学再発見

最後に、国際学生だけでなく、ぜひ本学の学生にも、文書館で本学の歴史を学んでもらいたい。

「自校教育」という言葉がある。昨年8月に時計台記念館で、IDE（民主教育協会）のセミナーが開催され、そのテーマが自校教育であった。自分の大学の歴史に誇りを持つことが学生の修学にも大きな効果があるとの報告があった。その時、講師の寺崎昌男先生が京都大学の文書館を誉めておられたのが印象に残っている。

私は国際学生の文書館訪問時には、日本人学生も同行させることを心がけている。文書館は、日本人学生にとっても改めて自分の大学の歴史を学び、先輩たちの努力や功績を知る場であり、国際学生の反応を触媒として、京都大学を再発見する場である。今後は、国際学生相手に、できれば日本人学生たちに、自らの言葉で京都大学の歴史を説明してもらいたい。そしてその言語は、日本語だけではなく、直接、国際学生に語り得る英語や中国語でも行われることを願っている。

アーカイブズの枠組み：オーストラリア国立大学アーカイブズ・プログラム訪問記

学習院大学人文科学研究科アーカイブズ学専攻助教　森本　祥子

オーストラリアは面白い。明らかにアングロサクソン系の人から「私たちはアジア人です」と言われたり、街なかでは、自分がどこにいるのかわからなくなるぐらい、各国語が四方八方から聞こえてきたりする。私はオーストラリアに対して、イギリスの元植民地（流刑地）という知識しかなかったが、どうやらオーストラリアの社会・文化は、そんな一言では説明できないような複雑なものらしい、と気づくのに時間はかからなかった。足掛け6年、幾度か訪れて自分なりのオーストラリア像を模索しているうちに、今やすっかりオーストラリアのとりこである。

そんなオーストラリアのアーカイブズの特徴を私なりにいえば、「枠組みが明解で合理的なこと」である。多文化が混在する国では、共通の感覚といったものが通用せず、何事も言語化し理屈をはっきりさせないと共有化できないからだろうか。また1000年以上の文書保存の歴史ゆえにヨーロッパや日本のアーカイブズでは避けられない、定義の揺れやそれに対する微妙な心理というのが、ここではあまり感じられない。

扱う資料についていえば、オーストラリアでは'in-house archives'（自組織運営資料）と'collecting archives'（他組織の資料や特定の視点で集められた資料）の分類が明確である。そうした定義を共有したうえで、小さな自治体がアーカイブズを維持できなければ州のアーカイブズが機能を代行するし、個人出所の資料も、「国立図書館が扱うもの」「国立戦争記念館が扱うもの」「地元で保存するもの」といった具合に、役割分担が明確である。

枠組みが明解なのは、アーカイブズが担うべき業務についての考え方でも同じである。例えば、現在国家政策としてアボリジニの権利回復が進められているが、各地のアーカイブズでは、かつてのアボリジニと白人の混血児の強制分離政策に関わる公文書の人名索引を整備してアボリジニの先祖調査を支援するなど、アーカイブズならではの堅実な取り組みをしている。

本稿では、in-houseとcollectingの双方の資料を保存するオーストラリア国立大学（The Australian National University、以下ANU）アーカイブズ・プログラム[*1]を紹介することで、オーストラリアのアーカイブズのひとつの典型をみてみたい。以下は、2008年12月に訪問した際にシニア・アーキビストのセーラ・レスブリッジからきいた話を元に筆者の感想もまじえて書いたものである。

ANUアーカイブズは、常勤アーキビスト2名で、大学の組織運営文書と、労働運動・企業関係資料のコレクションであるノエル・バトリン・アーカイブズ・センター（以下NBAC）を管理している。ここに最近太平洋地域研究に関するコレクション（同資料専属に別に有期契約アーキビスト2名）が加わったが、ここでは主要な資料である前者2資料にしぼって見ていくことにする。

ANUで大学組織運営文書の保存体制が整ったのは2001年だそうだが、管理にあたっては国立公文書館に倣ってシリーズシステムを採用している。これにはアイテムリストは作成していないが、一般的な組織運営文書であればそれで十分利用可能とのことである。一方で、NBAC資料については、全く異なるアプローチで管理している。資料群ベースで管理し、記述もアイテムレベルまで必要と考えている。大きな企業や労組の資料の場合は、毎年定期的に文書が移管されてくるといい、その点ではその特定の資料群についてみ

れば自組織文書と同じようにも思えるが、資料の利用ニーズが違うため編成・記述のアプローチが異なってくるという説明であった。NBAC 利用者の 35% は先祖調べをする人だが、同時に、自分がある会社に所属した証拠として労組の名簿を確認するといった利用もある。あるいは、あるビール醸造会社の資料の中に全国各地のパブの古い写真があり、地域の昔の風景がわかる資料としての利用の人気が高い。いずれにせよ、こうしたピンポイントでの情報の取り出しにはシリーズレベルの把握では対応できない。現実には人手が足りないために、必ずしもアイテム記述や索引作りを充実させられていないが、このように資料の性格が異なれば編成・記述の仕方も異なるという考え方自体ははっきりしている。とりたてて両者を統合したシステムを構築する必要は感じていないようである。

NBAC の収集基準は、「民間企業・労働組合・商工会議所などの文書で、国にとって大事なもの」である。一大学のコレクションではあるが、同じくビジネス・アーカイブズを収集しているメルボルン大学アーカイブズと共に、国立公文書館や国立図書館の収蔵資料と相互補完的な位置づけを与えられ、これらすべてを合わせると、国レベルで残すべき公文書・私文書がおよそ網羅されるようになっている。そのように重要なコレクションであるにも関わらず、大学からは「なぜよその組織の文書を大学で保存し、よその利用者の面倒をみる必要があるのか」との問いも突きつけられる。一時はアーカイブズ閉鎖の可能性まで取沙汰されたという。大学アーカイブズとして「大学の役に立つ」ことが第一義であるとする立場から、アーカイブズにとってこの問いへの答えを持つことは非常に重要だと考えられている。

筆者が ANU アーカイブズについて見習いたいと思ったのは、冷静な自己認識をふまえた業務の枠組みの明確さと、地に足がつきつつも積極的な戦略をたてているところである。例えば、資料収集にあたっては、コレクション形成方針を明確にして、それを実現するために積極的に寄贈依頼などを行う。収蔵資料全体の価値を高めることは、めぐり巡って大学そのものの評価を高めるはずだからである。あるいは、どの資料にどのレベルの記述が必要かを見極め、手のかけ方に軽重をつける。展示の広報効果は認識しているが人手も資金もないので、よその大きな展示に一部相乗りすることで実現する。何よりこうしたプロアクティブな発想は、職員の気持ちも前向きにする。自らの活動の枠組みをしっかり持つことと前向きな発想は、すべての基本であるとつくづく感じた。

筆者は以前から、徹底して in-house archives を前提に構築されているレコードキーピング理論を生み出したオーストラリアで、collecting archives の管理理論がどのように考えられているのかということに関心があった。今回 ANU を訪問したのは、その両方のアーカイブズを持つ組織の活動について直接知りたかったからだった。もちろん、その点でも学ぶことは多かったが、一番印象的だったのは、アーキビストたちの生き生きとした姿だった。応対してくれたセーラは以前は国立公文書館に勤めてそこでも十分なキャリアを築いた人だが、現在はこの小さなアーカイブズで、「ここは様々な業務をこなせるからとても楽しい」と笑顔だった。そして彼女の下では、かつての彼女の上司で元国立公文書館副館長が、これまた嬉々としてボランティアをしていた。「とにかくアーカイブズに携わっていることが好き」という人たちが、やるべきことの枠組みを明確に持っていること、それこそがプロとしてのアーキビストの仕事の仕方ではなかろうか。こうして充足感をもっている人たちといるとこちらも何だか嬉しくなってきて、実に気持ちよく 12 月の夏の青空のキャンベラを後にした。

---

*1 ANU アーカイブズ・プログラムのウェブサイトは、http://information.anu.edu.au/daisy/infoservices/24/331.html

一枚のビラでも大切に

松尾　尊兊

朝早く校門をくぐると、そこでアジビラを渡されることがしばしばある。大ていは読みすてにされる。中には全然読まぬ人もいる。しかし、そのビラ一枚々々にどれだけの苦心が払われていることだろうか。長い会議の末きまった文章を原紙にきる。夕やみ迫るボックスの中で、二人がかりで刷り終るともう夜更けである。そして学生の登校時に間に合うよう暗いうちに起きてビラを受取り、手わけして幾つもある校門に走る。配っている間も警官に注意を払わねばならぬ。こうしてようやく十時すぎ、朝飯にありつくのである。

われわれはこうした努力に対してだけでもビラを破り去る気になれぬ。しかもビラそれ自体斗いの貴重な記録である。左翼新聞でさえ書き現わすことの出来ぬ民衆の意志がそこによみとれるのがある。ビラを年代順に並べてみれば、自らその間の解放運動の発展が伺われる。しかもすこぶる生き生きと。たとえば、使ってあることばからしてちがって来る。新しいものほど民衆のことばで語られている。こういうことは見逃すことは出来ないことである。

かつて大原社会問題研究所では、こういうビラをつかってユニークな労働運動史をつくる計画が進んでいたという。（しかし残念ながら戦災をうけ資料は焼けてしまった。＝思想八月号、久留間鮫造氏「研究生活の思い出」）

先年以来、学術資料の保存が強調されてきたが、何も資料はいわゆる古文書に限るわけではあるまい。われわれはもっと身近なところに眼を向けて、その辺にちらばっているビラ一枚を大切にするところからはじめるべきである。（こういうことが今更いわれるのも、近代史の弱体の反映であろうか。）研究室の片隅にでも箱を置き、そこにもらったビラを入れておき、ある程度たまったら、一枚一枚裏打ちして、皆の共有財産として丁寧に保管しておくことをぜひやっていただきたいのである。学校に於てのみならず、各職場に於ても同断である。

われわれ民衆の、なやみといかりに満ちた戦いの記録を後世に大切につたえることも、歴史を学ぶものの一つの任務であると思うのである。

編集部より

大学文書館では、松尾尊兊名誉教授よりご寄贈いただいた1950年代前半における学生運動のビラを中心とした資料678点を、『戦後学生運動関係資料Ⅰ』と名付けて整理を行い、昨年9月24日に一般公開を開始しました。それと同時に、『『戦後学生運動関係資料』解説・目録』も刊行しました。同資料は、レッドパージ反対運動、破壊活動防止法反対運動、京大天皇事件などに関する貴重な記録です。

上記の文章は、松尾名誉教授が文学部卒業直後、人文科学研究所助手に採用された頃、民主主義科学者協会（民科）京都支部歴史部会機関誌『新しい歴史学のために』第18号（1953年10月30日発行）に寄稿されたものです。当時の雰囲気を生々しく伝えるとともに、『戦後学生運動関係資料Ⅰ』の由来を物語る資料ですので、松尾名誉教授および京都民科歴史部会のご了承を得て、ここに掲載する次第です。

『第三高等学校関係資料』の全面的公開を実施しました

京都大学大学文書館准教授　西山　伸

これまで本誌第12号、第15号でお知らせしてきましたように、大学文書館では『第三高等学校関係資料』（以下「本資料」と表記）の整理作業を行い、順次公開してきましたが、その作業がほぼ終了しましたので、2009年4月30日に本資料の全面的公開を実施しました。

本資料は、第三高等学校（以下「三高」と表記）およびその前身学校において作成・取得され、その運営、教育等に使われた資料で、2004年3月に大学院人間・環境学研究科・総合人間学部図書館より大学文書館に移管されたものです。その内訳は、①三高の運営に使われた公文書等、②三高および他校の学校一覧等の刊行物、③舎密局時代の教科書や三高入学宣誓簿等を含むその他の資料、となっています。

本資料は、大学文書館への移管以前の1950年代および1990年代に整理作業が行われ、研究目的に限定して公開されていました。今回、大学文書館では一般公開を実施するにあたって、従前の整理作業では必ずしも行き届いていなかった点を補うこと、資料中の個人情報の保護を行うこと、長期保存のための措置を行うこと、等が必要であると判断し、新たな整理作業を行ってきました。幸い、2006・2007・2008の各年度の全学共通経費の採択を受け、利用頻度の高いと予想される資料のマイクロフイルム撮影および紙焼き作成、さらに『『第三高等学校関係資料』解説・目録』の刊行を行うことができ、全面的公開の準備が整いました。

本資料の合計点数は6,554を数えます。そのうち、173点については、個人情報保護のため、あるいは資料の傷みが激しいため閲覧不可としましたが、残りの6,381点は一般公開となり、大学文書館閲覧室において見ることができるようになりました。閲覧希望資料の検索には前記の冊子体の解説・目録以外にも、大学文書館の所蔵資料検索システムを利用することができます。

来年廃校60年となる旧制高等学校に関しては、多くの研究の蓄積がありますが、各学校が所有していた資料の体系的な保存・管理および公開が実施されているところは少ないのが現状です。そのようななか、三高および京大教養部の関係者の努力により、本資料は質量ともに例外的に充実したものとなっています。特に公文書等は、三高の最も基本的な資料であり、また舎密局時代の資料は、明治初年の教育の実態を示す貴重な資料であると言えます。本資料および三高物理実験機器（総合博物館所蔵）などその他の資料によって、三高の歴史はもちろん、明治維新直後からの中等・高等教育政策全般の変遷を跡づけることも可能になるのではないかと考えられます。ぜひ、多くの方に本資料をご利用いただきたく、ご案内申し上げる次第です。

[日誌](2008年10月～2009年3月)

2008／10／1　尾池和夫氏より京都大学の歴史に関する資料寄贈。

10／6　大学文書館所蔵の非現用法人文書の一部を廃棄（～10日）。

10／7　文学研究科中国哲学史研究室・中国語学中国文学研究室・人文科学研究所共催企画展「京大中国学の裾野」開催（～10月17日。於・京都大学百周年時計台記念館歴史展示室）。

10／10　筑波大学より、大学文書館の現状・設備について視察のため来館。

10／15　西山准教授、学術交流協定にもとづき来学したタイ・カセサート大学学生に京都大学の歴史について講義。

10／15　佐藤次高氏より、第三高等学校剣道部写真寄贈。

10／21　テキサス大学および学習院大学より、大学文書館の現状・設備について視察のため来館。

10／27　大学文書館教員会議。

10／27　2007年度保存期間満了の事務本部および各部局の法人文書搬入（～10月31日）。

10／31　『京都大学大学文書館だより』第15号発行。

11／5　工学研究科都市環境工学専攻主催企画展「京都大学工学部衛生工学科50年の回顧と展望」開催（～11月30日。於・京都大学百周年時計台記念館歴史展示室）。

11／6　読売新聞社、常設展「京都大学の歴史」について取材。

11／10　学外より、京都帝国大学卒業生に関する照会。

11／12　西山、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会において「アーカイヴズにおける評価・選別―京都大学大学文書館における実践を手掛かりに―」と題して講演（於・奈良ロイヤルホテル）。

11／14　国立国語研究所より、大学文書館業務の視察のため来館。

11／14　学外より、第三高等学校外国人教員に関する照会。

11／17　山崎和夫氏より、第三高等学校関係資料寄贈。

11／25　中塚明氏より、京都大学天皇事件関係資料寄贈。

11／28　京都市上下水道局より、大学文書館の現状・設備について視察のため来館。

11／29　京都橘大学より、大学文書館施設見学のため来館。

12／1　大学文書館教員会議。

12／2　大学文書館企画展「京大吉田キャンパスの形成」開催（～2009年2月1日。於・京都大学百周年時計台記念館歴史展示室）。

12／3　西山、早稲田大学大学史資料センター創立10周年記念講演会「私立大学アーカイブズの未来―学内文書移管を中心に―」において、「大学アーカイブズの意義―学内文書の移管・公開から考える―」と題して講演。

12／4　東北大学史料館より、大学文書館業務の視察のため来館。

12／4　京都新聞社、学徒出陣について取材。

12／26　秘書・広報室より、京都大学発行の報告書・資料集等寄贈。

2009／1／1　事務補佐員豊田敦子雇用。

1／14　大学文書館教員会議。

1／17　清水助教、芳賀町総合情報館へ出張。

1／22　西山、KEK-SOKENDAI研究会「記録管理とアーカイブズ」において、「大学におけるアーカイヴズ―文書の移管・公開・評価選別」と題して講演。

1／24　西山、立教大学特色ある大学教育支援プログラム採択記念シンポジウムⅣ「自校教育の到達点と今後の課題」において「事例報告：京都大学の歴史についての講義」と題して講演。

1／31　「大学アーカイヴズに関する研究会」開催（於・京都大学百周年時計台記念館）。

2／3　大学文書館企画展「戦前の学生生活―創立から1930年代までの京都帝国大学―」開催（～4月5日。於・京都大学百周年時計台記念館歴史展示室）。

2／4　学外より、京都帝国大学卒業生に関する照会。

2／18 東京芸術大学より、大学文書館の現状・設備について視察のため来館。

2／23 朝日新聞社、楽友会館・近衛館について取材。

2／26 文部科学省より、大学文書館の現状・設備について視察のため来館。

2／27 『京都大学大学文書館研究紀要』第７号発行。

3／ 5 大学文書館教員会議。

3／ 5 防衛大学校より、大学文書館の現状・設備について視察のため来館。

3／10 大学文書館運営協議会。

3／12 MBS 企画、京都大学の歴史について取材。

3／31 『『第三高等学校関係資料』解説･目録』発行。

3／31 『『吉田寮関係資料』解説･目録』発行。

3／31 常設展「京都大学の歴史」英文図録、発行。

3／31 事務補佐員中川未来退職。

3／31 事務補佐員豊田敦子退職。

大学文書館の動き

常設展図録の英文版を刊行しました

大学文書館では、このたび常設展「京都大学の歴史」図録の英文版を刊行しました。2003 年 12 月の展示開始以来、毎年 4 万人近い方々に展示をご覧いただき、ご好評をいただいている常設展ですが、展示の内容について説明した図録が日本語版しかなく、国際学会などで来場された皆様には長くご不便をおかけしていました。

図録英文版は、A4 判、24 頁で、構成は日本語版とほぼ同じですが、冒頭に“A Short History of Kyoto University”を置き、京大の歴史や日本の高等教育制度について略述した文章を挿入した点が異なります。翻訳は、文学部講師で翻訳家のマイケル・ジャメンツ氏にお願いしました。高等教育制度に関する用語や、戦前の史料独特の言い回しなど、ご苦労が多かったと思いますが、非常に洗練された英語に訳していただいています。

日本語版と同様、展示室において無料で配布していますので、外国の方のご案内などに存分にご活用ください。

お知らせ

大学文書館では学部や研究所等が発行した刊行物を閲覧できます

大学文書館では、学部や研究所、センター等から収集した各種の刊行物を、大学文書館閲覧室（百周年時計台記念館 1 階歴史展示室内）に配架しています。シラバス、ニューズレター、自己点検・評価報告書、紀要等、配架されている約 3,000 点の刊行物からは、近年の大学における組織改変の状況や、多岐にわたる教育・研究の取り組み等について知ることができます。これらの刊行物は、閲覧室内で自由に読むことができ、かつ目録や検索システムを用いて探すことも可能ですので、是非一度ご利用ください（開室時間は 9：30 ～ 17：00、毎月第 1 月曜日のみ休室）。

京都帝国大学書記官考

京都大学大学文書館助教　清水　善仁

明治30（1897）年6月18日、京都帝国大学創立にあたり、京都帝国大学官制が定められた（官報公布は22日）。そこで規定された職員は「総長」「書記官」「舎監」「書記」の4種類である。このうち書記官は「庶務会計ヲ掌理」し、舎監（のち学生監に改称）は「学生ノ取締ニ関スル事ヲ掌ル」とある。書記官と舎監は兼務されることが多く、したがって書記官は総長を補佐する事務方の首席として位置づけられる。しかしそのような存在である書記官の意義や役割などについて、実はそれほど研究が深められていないというのが現状である。本稿でそのすべてを明らかには出来ないが、書記官をめぐる一、二の論点を指摘することで、今後の研究への手掛かりとしたい。

書記官は明治30年に設置され、昭和21（1946）年の「帝国大学官制」で廃止されるが、明治44年に一度廃官となり、大正10（1921）年には再び設置された。以後、昭和20年6月に書記官の上に「事務監」が置かれたが、それも「帝国大学官制」で廃止されたので1年ほどのことであり、戦前のほとんどの期間は書記官が事務方の首席であった。ちなみに（東京）帝国大学では、明治19年の「帝国大学令」による書記官設置以来「帝国大学官制」まで、定員数の変動はあっても廃止されたことは無い（『東京大学百年史』参照）。

ではなぜ、京都帝大では明治44年に一度廃官となり、再び大正10年に設置されたのか。このうち後者の再設置の経緯については、大学文書館所蔵「官制改正関係書類　自明治四十年至大正十四年」（資料番号01A00198）に記載がある。大正9年4月、京都帝大事務官（書記官廃官後、庶務・会計事務を掌理、定員2名）岡本一郎は書記官設置などのための官制改正を文部省に要請した。その理由を岡本は、この間の学部新設や医学部附属医院の拡充などで事務量は年々増加しており、事務官2名では「到底事務ノ敏活ヲ期シ難キ状況ニ立至」と述べ、事務官の「一名ハ専ラ会計事務〔中略〕他ノ一名ハ医院事務」を担当し、「庶務ニ属スル事務ニ従事セシムル」役職として書記官の設置を求めている。岡本はこの要請にあたり、大学創立以降の予算や人員の変化に関するデータを添付し、大学規模の拡大を具体的な数値から提示している。翌10年、書記官の設置が実現したわけだが、この要請が奏功した可能性は十分考えられる。

以上は書記官の存廃という制度史的な側面だが、書記官に就任した個々の人物に対する分析も不可欠だろう。明治35年7月、織田萬ら5名の法科大学教授が木下広次総長に提出した意見書に次のような一節がある。「総長小節ヲ顧ミス事務官ニ委任スルノ跡アルニ拘ラス、書記官事務ノ材ナク補助ノ任ニ堪ヘス、之カ為メニ統一ヲ缺キ事務散乱ノ弊アルコト、故ニ書記官ハ速ニ之ヲ罷免シ、更ニ適任者ヲ以テ之ヲ充ツ可シ」（「〔総長批判の意見書〕」、大学文書館寄託「木下広次関係資料」木下-Ⅰ-31、読点は引用者）。ここで槍玉に挙げられているのは第二代書記官森春吉である。何とも手厳しい批判だが、逆説的に取れば、大学運営における書記官の重要性を如実に示したものとも読める。その意味で、この批判内容の実証的な検討は、森書記官の人物像はもとより、当該期の書記官の位置づけを明らかにすることにもなるのではないか。草創期の京都帝大の実相にかかわる興味深い論点である。

京都大学大学文書館だより　第16号　2009年4月30日　京都大学大学文書館（だいがくぶんしょかん）発行
〒606-8501　京都市左京区吉田本町　Tel.075-753-2651　Fax.075-753-2025
E-mail:archiv52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp　http://kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/